

Guiding Question

これまでオムニバスで示されてきたさまざまな「中国研究」を、学術研究のあり方という観点から整理し、受講者それぞれの専門分野に即した「中国研究」を構想する。ジョヴァンニ・アリギ『北京のアダム・スミス』では、世界システムにおける「中国」（これは必ずしも領域国家としてのそれではない）の存在を確かめようとする（≠世界システムのなかに「中国」を位置づける）。この着想にもとづいて、中国研究の多様なあり方を類型化し、オムニバス講義を総括する。オムニバスのなかからテーマを選び、世界システム論的（各国を独立した単位として扱うのではなく、世界を一体として把握する総合的な視座）にテーマの組み替えを試みる。アリギの議論のなかで重視されているように見える「人口」「環境」「法」について、特にとりあげてみる。①なぜ中国では、13億を越える人口が維持され得るのか。②それを支える環境条件とはどういったものか。③それは、どのような統治によって可能になるのか。④それは、将来的に環境の決定的な破壊につながるのか、そうではないのか。⑤こうした中国のあり方は、世界にどのようなインパクトをもたらすだろうか。⑥この図式に、「移動」を組み込めばどうなるだろうか。

（今回はグループディスカッションではなく、全員で質問を考えるという形となった）

担当教員の総括

①番の質問に対し、「文化統治」と「政治力」という答えが出てきたが、「同じ文化を信仰している」、あるいは、文化が完全に一致しているとはいえないし、農業と牧畜業、または漢民族といわゆる「少数民族」の文化は相当違うと思う。②に対して「農業大国」という論点が出てきたが、農業生産だけでは無理である。生産したものをどのように流通させて、人々の手に渡すかを考えなければいけない。人口を維持できるような生産量に達したとしても、そこに食糧の分配問題や流通問題が存在している。今まで何とかできたが、今後はどうなるかという質問に対して、将来的に環境の決定的な破壊が起こったとしても、それを何とか乗り越えたとしても、中国は大きなインパクトをもたらすことになる。仮に中国では農業生産ができなくなった時、中国の食料に依存している日本を含めて、東南アジア諸国は大変なことになるだろう。最後に、図式に「移動」を組み込めばどうなるかという、国内の人口を外に移動させることによって、既存の環境への負荷は軽減されるが、同時に負荷を受ける地理的範囲は広がる。その際の環境への負荷のされ方は、域内の統治コマンドの影響をより小さく受け、域外の交渉的法文化の影響をより小さく受けることになる。